

## 質的研究における分析と解釈 (Ⅲ)

——日記にみる生活構造——

近 藤 敏 夫

〔抄 録〕

大正期金沢の象嵌職人が地域社会で結ぶ人間関係を分析し、個人が主体的に形成する生活構造の側面から地域社会の特徴を検討する。日記分析では個人の主体的関与のあり方を明らかにできるため、地域社会の構造を個人による人間関係の主体的選択の結果、構成されてくるものとみなす。個人の生活は社会集団への参与によって構造化されるが、その生活構造の要素として仕事関係とインフォーマルな人間関係の2つが重要である。さらにインフォーマルな人間関係では、友人関係、親類関係、近隣関係の三種が重要である。大正期金沢の「地の者」には、これら三種の人間関係が重複しており、さらに弘安のように伝統職人の場合、仕事関係がインフォーマルな人間関係と重複する。弘安の生活構造は地域社会の形成と維持に寄与しており、このような生活構造が「伝統都市」金沢の創出、すなわち金沢の近代化を特色づけている。

キーワード 日記分析、生活構造、近隣関係、近代化

1. 日記分析の意義
2. 日記データベースの作成
3. 日記のコーディングとデータ群の抽出

以上、第41号 (2005年9月刊) 所収

4. 米澤弘安の生活史
5. 金沢の地域社会の特色 —— 同窓生との共同作業にみられるエートス ——
6. 伝統の再構成の可能性 —— 社会的合理性の条件と限界 ——

以上、第42号 (2006年3月刊) 所収

### 7. 生活構造の基盤 —— 仕事関係と近隣関係 ——

前号では、(1) 金沢の象嵌職人である米澤弘安が地域社会で「同窓生」を典型とする同質的な人間関係を形成し、異質な他者の態度を取得する傾向が欠如していることを指摘した。

また、(2) そのことが集団主義の社会的合理性の形成を阻んでいるとの問題を提起した。本号では、地域社会の中核をなす近隣関係について分析し、大正期の金沢における地域社会の特徴を検討する。日記分析では個人の主体的関与の仕方を明らかにすることができるため、地域社会の構造を個人による人間関係の主体的選択の結果、構成されるものとみなす。分析方法としては生活史法および生活構造論の知見を用いる。なお、ここで「構造」とは構造主義的な意味での深層的なそれではなく、人間関係が恒常化し、安定化したものを構造と呼ぶことにする（渡邊益男 1996: 223）。

個人の生活は社会集団への参与によって構造化されると考えられるが、生活構造はフォーマルな人間関係とインフォーマルな人間関係の2つから構成されている。弘安の場合、フォーマルな人間関係では仕事関係が重要であり、インフォーマルな人間関係では友人、親類、近隣の三つが重要である（鈴木広 1986:183）。大正期金沢の地の者（ぢのもの）には、インフォーマルな三種の人間関係が重複していた。さらに弘安は伝統工芸を家業とする職人であるため、仕事関係がインフォーマルな人間関係を基盤にして成り立っていた。前号ではインフォーマルな人間関係のうち、「同窓生」を中心とする友人関係について考察したが、本号ではフォーマルな仕事関係とインフォーマルな近隣関係を中心に考察することにする。

本論に入る前に近隣関係のインフォーマルな側面に焦点を絞る理由をことわっておく。町内会はフォーマルな近隣関係であると考えられるが、大正期金沢には現在のように全戸加入を原則とし規約を有する町内会は存在しなかった。明治・大正期の金沢では「通り」、「小路」と呼ばれる街路で、住人どうしが出会い、挨拶をかわし、世間話に興じ、獅子舞や映写会などを催していた（金沢市史通史編3 近代: 892）。街路の清掃、街灯の管理、除雪などは住人が主体的に行ない、その街路によって区切られる地帯が町内としてのまとまりをもっていた。弘安の日記にも街灯の話題が出てくる。「・・・辰巳君が来て、町内二電燈を取ったらどうだらうと云ふ相談をせられたから賛成し、早速山宝方へ電話を借って電気會社へ十六燭外燈の値段を問ふ・・・山宝の主人と暫く話し、帰り二辰巳君と泉屋、幾田、関、松本外一軒へ其相談をした 不在の處もあったので、二三日中又確聞せねばならぬが、多分纏るだらう」（大正4年1月2日）。この日記記述から推測できるが、明治・大正期の金沢には現在のような全戸加入型の規約をもつ町会（町内会）が明確には存在せず、町内はインフォーマルで未組織の近隣集団であったようである。町内に街灯を引くことに関しては、隣家の辰巳君が弘安に相談を持ちかけ、辰巳君と弘安が近隣の了解を取って回った。フォーマルな町内会で近隣の意見を集約してはいない。そもそも現在の町内会組織が当時は存在していなかった。大正期までの金沢では、町内の采配は古くから居住する地の者や経済的な有力者が仕切ることが多かったといわれている（金沢市史通史編3 近代: 898）。

弘安は経済的な有力者ではなかったが、金沢の地の者として近隣集団に参与し、また新たな近隣集団の形成にも積極的に関与していた。弘安の生地は金沢市下新町（現在の尾張町）であり、弘安が2歳のときに父の仕事の便がよいということで宗寂町三番丁に引っ越してきた。弘安の生地と転居先は1kmも離れておらず、どちらも職人が居住する地域であった。転居先でも弘安は金沢の地の者として近隣関係を結ぶことができたと考えてよいだろう。また、弘安の近隣への主体的関与は父親から継承された側面もあり、とくに伝統工芸の象眼職人で

あることが、近隣への主体的関与の仕方を方向付けていたと考えられる。

以下、8節で、弘安の仕事関係が金沢の地域社会の形成に果たした役割を考察し、9節で、弘安の近隣関係を通して金沢の地域社会の特徴を考察する。

## 8. 金沢の近代化と伝統工芸の再生

### 8.1 「伝統都市」の創出

明治5年に石川県が誕生したとき金沢の人口は109,685人であり、東京、大阪、京都につぎ、地方都市では名古屋と並び第一の規模であった。しかし、その後、金沢の人口は減少し続け、明治29年には83,875人の最低を記録している(図1)。江戸時代は加賀百万石の城下町として栄えた金沢であったが、新政府への支持が遅れたこともあってか、明治維新で金沢は冷遇されたといわれている。また、当初の県庁所在地が石川郡美川町(明治5年から明治6年)に移されたことに象徴されるように、金沢は発展することを阻まれていたといえる。ただし、金沢の旧藩士や商人、職人は金沢の衰退に歯止めをかけ、近代都市として発展させようと種々の対策を講じていた。その戦略の一つが、加賀百万石の工芸を継承し、金沢を「伝統都市」として創出させる動きであった。つまり、金沢は自らを近代化する戦略のひとつとして「伝統都市」になることを選んだのである。

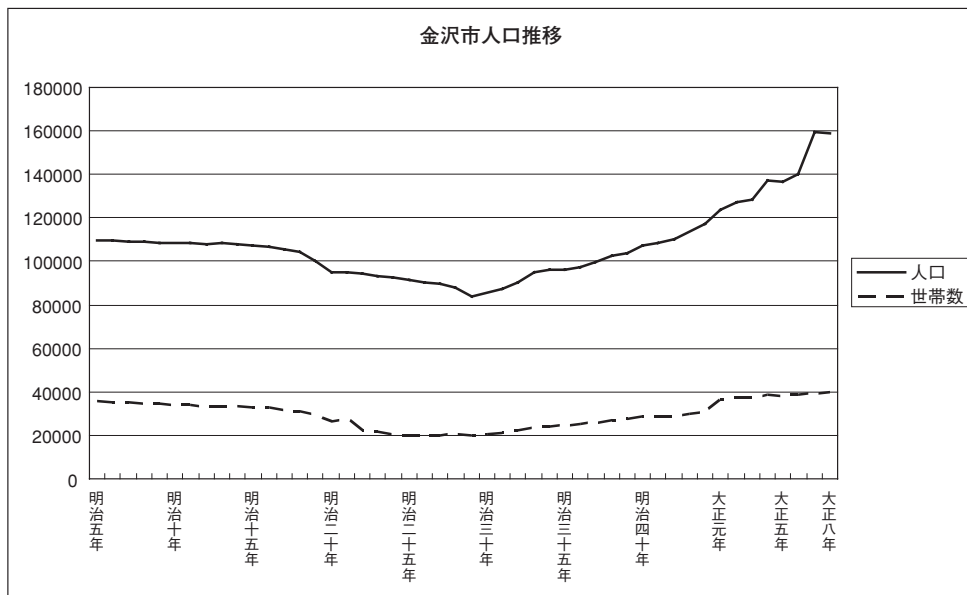


図1 金沢市の人口推移

出典：『金沢市史資料編 12 近代二』p.771 より作成

城下町金沢は明治維新を契機にして人口の面でも経済の面でも衰退したのであるが、明治中期以降、「伝統都市」を標榜して再び発展し始めた。明治24年に開催された金沢開始三百年祭では、各町が幔幕、提灯、旗などの飾り付けをしたが、その装飾のデザインは加賀藩主

前田家の家紋であり、住民は前田利家が築いた「恩恵」を享受し、それを継承、発展すべき「市民」としての誇りをもたされたという（金沢市史資料編 14 民族：15-16）。この動きは基本的に平成の現在まで継承されてきており、金沢では「加賀百万石」という言葉が機会あるごとに持ち出され、とりわけ伝統工芸や観光・商業の側面で「伝統都市」であることが謳われている<sup>(1)</sup>。

## 8.2 職人世界の近代化 —— フォーマルな仕事関係の形成 ——

米澤弘安と父の清左衛門も金工職人として「伝統都市」の創出に積極的に関与することになる。清左衛門は加賀藩の象眼技術を習得し、加賀藩から名字帯刀を許されたことから、加賀藩の恩恵を直に享受した人物である。その清左衛門が加賀藩の伝統を再生させ、金沢を「伝統都市」として創出させることに寄与したことは当然の成り行きだったといえる。明治6年、清左衛門はウィーンで開催された万国博覧会に彫金を出品しているが、これは金沢の金工職人たちが海外に販路を見だし、伝統工芸の再生を図るためのものであった。彼らは万国博覧会や内国勸業博覧会に作品を出品し、海外や国内の需要を開拓していった。明治14年に「銅器製造者同盟」が結成され、同19年に「金沢銅器会社」に改組されたが、そこに米澤清左衛門の名前がみられる。当時は工芸部門で個人企業の設立や廃業が繰り返されており、職人の数も増加していた。大正10年頃までは工芸品が金沢の主要工業品であり、かつ主要輸出品でもあった（田中 1974:63-70）。

金沢の場合は伝統工芸の振興が経済政策の中心に位置づけられていたが、職人の世界ではもはや徒弟制度が通用せず、名家の商人・職人であっても近代的な経営をせざるをえない状況になっていた。近代化の側面として「伝統都市」が創出されることになるため、昔の伝統がそのまま再現されることにはならなかったのである。名家の商人・職人のなかから、近代的な経営に転換できた者が、金沢を伝統都市として創出させることに寄与しえた。米澤家との関係で言えば、加賀藩おかかえの上級職人であった水野家が、金工界の近代化を積極的に進めており、明治以降は欧米の販路を開拓し、その商品を製作するために会社組織を作っている。弘安の日記からも水野家からの仕事で生計が成り立っていたことが推察される。水野家は海外の博覧会に伝統工芸品を出品することによって海外の販路を開拓していった。例えば、明治26年米国コロンビア市で開催の万国博覧会には職人数十名（延べ人数2,167人）を動員し、菓子商で市会議長の森下八左衛門（森八）から多額の資金援助を得て、「加賀象眼太鼓鶏大置物」を制作し、最高金賞を受賞している。この仕事には米澤清左衛門も参加していた（田中 1992: 50）。

金沢市でも伝統工芸への期待が大きく、明治中頃には石川県商品陳列所が整備され、弘安と清左衛門もこれに関与することになる。日記記述には弘安と父がたびたび陳列館に出向いていたことや、陳列館からの注文を受けて納品していたことがわかる。また、明治45年7月には「石川県商品陳列所出品人共勵會」が石川県や金沢市の支援で設立される。弘安の日記には、「物産陳列館ニハ本日共勵會總會と懇親會があると云ふ・・・内務部長始めとして縣属、市史等着座あり 夏秋内務部長の演説あり 要は金沢ハ土地及人心もよい處だが、殖産工業が発達せないから奮勵せよと云ふのだ」（大正4年1月10日）とあるように、県や市は伝

統工芸を推進することによって金沢の殖産興業を図ろうとしていた。この方針は大正10年以降に繊維産業が石川県の主要産業として不動の位置につくまで継続している。共励会では雑誌も刊行し、金沢の工芸をリードした。ただし、伝統工芸は近代産業として発展するには限界があり、大正末期には美術品・芸術品として生き残りをかけることになった。

金沢の伝統工芸界では、会社や共励会など、経営者や行政がフォーマルな集団に職人を組織化するだけでなく、職人達も自らが組合を結成する動きがあった。大正8年1月10日には「金沢市金属器組合」が40人で結成されている(田中1993: 14-28, 57-58)。同日の弘安の日記には「金属業組合創立總會が本日午後六時金城楼ニ於て発會式を舉ぐ故日暮れて行く 大半来て居られた 来客は中村縣属、高橋市勸業課、松田陳列館長、鈴木圖案課長、吉倉(北國新聞記者)、麻場(北陸毎日)、會員は四十名、七時開會、水野組合長の式辞、朗讀ありて後、新年宴會となる」とあるように、来客者には県や金沢市や陳列館からも列席があり、官民挙げて金沢の伝統工芸を盛り上げようとしていたと考えられる。大正10年頃までは欧米での伝統工芸品の需要増があり、金工職人の数も増加していた。なお、金属業組合は大正15年に「金沢市金属工芸同業組合」(119人)に発展解消されている。このように金沢の「伝統工芸」は江戸時代の徒弟制度ではなく、フォーマルな仕事関係に基づいて近代産業の仕組みと販路を整えていったのである。

弘安は共励会の雑誌に広告を掲載し、会の中心人物として積極的に参加していた。また、弘安は大正天皇の御大典の記念額を共励会から制作するよう依頼されていた。弘安の仕事は、近隣の顧客の注文品、国内外に販売する工芸品、国内外の展覧会に出品する芸術的作品、それに官公庁から請け負う皇室関係の仕事に大別されるが、この皇室関係の仕事は弘安にとって名誉なことであり、また天皇の恩恵で生活が成り立つという側面があった。それゆえ、行政サイドから天皇制の末端機構として町会(町内会)を組織化しようとする動向に弘安が関与することになっても不思議ではなかった。

象嵌の仕事関係を通して形成する弘安の生活構造が、金沢市を「伝統都市」として創出させることに直接、寄与することになった。その上、「伝統都市」の創出が天皇制の下での近代化の側面であったことから、皇室の仕事を請けていた弘安は地域社会の形成と維持にも積極的に関与しえたのである。弘安は加賀藩の伝統と天皇の恩恵を生計の基盤とした人物であり、そのような経済的背景があるからこそ、典型的な金沢の地の者として地域社会の形成に寄与しえたと考えられる。

## 9. 近隣関係の構造

### 9.1 人口の社会増と弘安の人間関係

金沢の産業は上記の金工業以外にも機械産業や繊維産業で種々の対策がとられ、明治中期まで続いた不況から脱することができた。明治29年、弘安が9歳のときに83,875人の最低を記録した人口も、その後は人口増に転じ、大正8年、弘安32歳で長女が誕生したときには158,954人と2倍近くに増加していた。大正期末には金沢は北陸の商業・文化の中心地として「モダン都市」の色彩を帯びたといわれる(金沢市史通史編3近代: 518)。大正2年に初の常



設映画館、大正3年に撞球（ビリヤード）場が10軒以上、大正6年にカフェーが開店、市電も大正8年に開業した。人口は明治30年から大正15年まで平均して毎年2%の増加になっていた。このように、人口増の面からも金沢は都市化の傾向にあり、他地域からの新参者が増加してきていた。ただし、弘安の日記でみる限り、弘安の人間関係には旧知の者が多く登場し、新参者が登場することは少なかった（表1）。

表1 弘安の人間関係の重複

友人関係	高等小同窓	玉井敬泉	久保六平	西村次作	安江喜作	平桜友作	能崎兼松	金田精治
	教習館同窓	横地君	大村君	高井	沓木	大村欣一	大村利昌	福田
	謡社中	能口多作	天地謙吉君	藤田余三治	半田梅次君	辰巳才一君	吉田与三治	千田登三治
	塩梅会	玉井敬泉	久保六平	西村次作	安江喜作			
近隣関係	町内	上野太一君	山室直吉君	京屋	酒井様	辰巳新太郎君	吉田与三治	千田登三治
	近衆	能口多作	天地謙吉君	藤田余三治	伊藤酒店	辰巳新太郎君	村上豆腐店	千田登三治
	近所	泉屋	石井様	松本様	金子様	辰巳様	荒木様	加藤様
	親交團	上野太一君	山室直吉君	京屋	酒井三喜君	辰巳新太郎君	吉田与三治	松原勤二君

表1には日記に登場する友人関係と近隣関係を列挙してあるが、弘安の人間関係の核になっているのは前号で考察した「同窓生」を中心とする友人関係と家族・親族の親類関係であろう。ただし、弘安は近隣との関係を大切にしており、さまざまな役割を担っていた。友人関係と近隣関係のメンバーにも多くの重複がみられる。具体的には、友人関係のなかの謡曲の社中は、「近衆」とメンバーがほぼ共通しており、弟の清二も交えて、弘安は謡を頻繁に行っている。謡は大正期金沢の代表的な遊びの形態であつたらしく、ほぼ同世代の男性が頻繁に謡を行っている記述がみられる。また、「町内」と「親交團」に登場する人物も重複が多いが、これは後に述べるように親交団が町会（町内会）の母体になるような組織だったからであろう。

人口の社会増が多い時期に、日記に登場する人物は同窓生を中心とする「地の者」にほぼ限られている。たとえ近隣に居住する者であっても登場回数が5回以下の者が数名いる。彼らは金沢の「地の者」でなく、新参者であると推測できる。これに対して金沢の地の者と思われる近隣者の登場回数は100回以上に及んでいる。地の者とのつきあいが謡曲やカルタなどの遊び、冠婚葬祭の話題などで頻繁に記述されるからである。これは新参者に対して閉鎖的な金沢の特徴が現れたものといえるかもしれない。金沢が「伝統都市」として発展し、そのことに誇りをもたされた市民の感情が、金沢の閉鎖性と結びつき、金沢独特の内発的發展を可能にしたとも考えられる。すなわち、旧士族であれ、商人や職人であれ、地の者が中心となって、金沢の近代化が推進されたのである。金沢市の人口が明治29年に最低の83,875人を記録し、その後、大正期には2倍に達しているが、このように新参者が半数近くを占めるようになって、金沢では地の者が近隣の采配をし続けていたようである。

## 9.2 近隣集団の特徴 —— インフォーマルで未組織な集団の役割 ——

鈴木広の「土着層—流動層」と「上層—下層」の図式にしたがうなら（鈴木 1986: 180）、弘安は土着層・中間層であるが、仕事関係では金沢の土着層・上層との結びつきが強かった。

鈴木の図式は生活史を想定して作成されたものではないが、本稿では日記を資料として弘安の生活構造を分析することにする。

分析の第一段階として、鈴木の種類で近隣集団を再構成してみよう。弘安の日記には近隣を指す言葉として、「町内」「近衆」「近所」が用いられ、また町会（町内会）としては「親交團」の記述がみられる（表2）。これら4つのカテゴリーで弘安の近隣における生活構造の詳細を紹介してみよう。まず、4カテゴリーの出現頻度を示してみると、「町内」という言葉は時期にかかわらず出現するが、「近衆」は大正7年まで出現し、それに代わって「近所」が大正5年、6年あたりから出現してくる。ただし、弘安の日記の「町内」は、今日で言う正式な規約をもつ「町会（町内会）」ではない。町会に相当する言葉は、大正3年11月24日から登場する「親交團」であろう。弘安の集団参加は、土着層（地の者）で中間層の者に特徴的であると考えられる。

表2 近隣関係：カテゴリー名の出現頻度

近隣集団	出現頻度	大正2	大正3	大正4	大正5	大正6	大正7	大正8	大正9	大正10
町内	70箇所 (107)*	1	1	22	5	10	10	4	3	14
近衆	35箇所 (57)	9	3	12	5	4	2			
近所	37箇所 (71)	1	0	0	2	6	5	9	8	6
合計	142箇所 (235)	11	4	34	12	20	17	13	12	20
親交團	15箇所		4	8	3					

\* ( )内は日記全体での出現頻度

弘安の日記で最初に「親交團」が出現した記述をみると、「各町の団体会の下相談を開くとの事で、昨夜頼まれた故七時より行く・・・待つ程・・・都合八名となった 議論百出の決果一般の入會は至難ニ付、物堅い有志の団体として募集する事ニ決し會名は、親交團と称し、親睦を図るを目的とす 規約の草稿ニ訂正を加へ十五ヶ條を造り上げた 會費一口五錢宛ノ事」（大正3年11月24日）とあるように、金沢市の他の地域でも「団体会」なるものがこの時期に結成されている。その目的は大正4年11月に催される大正天皇の御大典の祝賀行事に町内をあげて祝うためであった（金沢市史通史編3近代：897）。団体会の結成は行政サイドから天皇制の末端機構として市民を組織化しようとする動きであった。

大正4年1月19日の記述をみると「親交團の発會式は本日午後三時より松登美樓ニ於て開かる事なれば、吾等世話人ハ三時頃より出掛た され共人寄遅く午後五時過ぎ漸く三十名程となりたれば開會する事となり、座長を酒井三喜君ニ頼み、僕が規約讀上役となる」とある。弘安は行政からの要請を受けて団体会の結成に関与することになり、団員の中では年長者ということもあってか、世話人の位置にいた。しかし、弘安の町内では親交団がなくても御大典の準備が進行しており、改めてフォーマルな団体を組織化する必要がなかったと考えられる。基本的に御大典の準備は町内の地の者が進めており、それら青年有志が親交団を結成することになったようである<sup>(2)</sup>。もともと弘安は御大典の準備に積極的に取り組んでおり、たとえ親交団が結成されていなくても、実質的に同じ役割を分担することになっていたと推測できる。また、弘安は仕事関係の共励会から御大典記念額の製作を依頼されていた。たとえ

親交団に入団していなくても弘安は仕事の面からも御大典を準備する立場にいたのである。

近隣関係が行政サイドから天皇制の末端機構として整備される以前に、すでに金沢では住民が主体的に天皇制との結びつきを実行していた。とくに、明治以降の都市祝祭を契機にして、住民サイドから何らかの生活の必要があって、天皇制が近隣関係に浸透していったものと考えられる。弘安の場合は仕事関係を背景にした利害があったために、近代の天皇制と近隣における活動が接続しえたと考えてもよいだろう。

また、天皇制と近隣関係をみるとき看過できないのが、神社への参詣や天神講・大師講など宗教的活動への参与であろう。とくに金沢の場合、講が町会の原型になったとの指摘もある。米澤家では父母も弘安も、頻繁に神社仏閣に参詣し、また頼母子講、大師講、天神講にも参加していた。神社仏閣が近隣の人々の会合の場所になっていたとも推測できる。日記には近所の寺院（花山）が参詣の場所だけでなく、各種会合や謡曲の場所としても頻繁に登場している<sup>(3)</sup>。

町内会が伝統的な封建集団として位置づけられることがあるが、昭和15年頃まで金沢の地域社会では旧来のインフォーマルで未組織の近隣関係が中心的なものとして維持されていたと考えられる。昭和の戦時体制に入ってから天皇制の末端機構としての全員参加型の町会が金沢でも組織されたのである。ちなみに弘安はこの戦時体制下の町会でも重要な役割を演じることになり、町会長として近隣をリードしたという。（山田 2002: 61）

「親交團」の記述は大正3年11月から出現するが、大正5年2月以降、記述が見当たらなくなる。弘安が関与しなくなったというよりも町内で「親交團」を継続すること自体が問題化したようである。弘安の日記には「親交團繼續か解散かと云ふ問題ニテ決果は以前の分ハ自然消滅として更ニ各町有志ニテ（眞ニ入會希望者）組織する事となし 来る二十六日總會兼新年會開催する事となり散會す」（大正5年2月18日）とある。有志のみが2月26日の新年会に出席し、親交團を継続することになったが、弘安は当日欠席し、それ以降、親交團の記述は無くなっている。

大正期金沢には町会というフォーマルで組織化された集団はまだ存在せず、弘安は人間関係を主体的に選択しながら町内の人々と近隣関係を結んでいる。弘安にとって町内はアソシエーションな関係からなっていたともいえる（岩崎 1989: 10-11）。町内の集団は未組織集団であり例会というものはなく、生活の必要に応じて人間関係が形成され相互作用が生起していた。弘安の日記から生活の必要の例を上げると、冠婚葬祭、電灯の管理、街路の清掃、御大典などの祝賀行事、火事場の手伝いなどである。これらの出来事は町内単位で対処すべき問題と考えられていたようであり、町内の有力者との相談で事が運んでいる。弘安は有力者ではないが、地の者の中心として「集金」や「募金」、火事場の手伝いなど、実労を伴う関与を担っていたことがわかる。金沢市史によれば、町会（町内会）の組織化背景には街路整備、都市祝祭、公金徴収、自治防火、運動競技の5つがとりあげられている（金沢市史資料編14 民俗: 54）。これらの地域活動を弘安は町会がなくても担っていたのである。

ちなみに、弘安の日記で親交団の出席者をみると、大正3年11月24日から大正5年2月18日まで31名が登場する。各戸1名が出席しているとみなすと、親交団は弘安の家を含めて32戸以上から成っていたことになる。この戸数は大正4年11月29日に「・・・町内の軒数



を聞二来る 三十五と書いて渡す」とあることから、弘安の町内の戸数とはほぼ同数であることがわかる。弘安の町内では大正御大典を契機にして成立した「親交團」が後の町会の母体になっていったと考えてよいだろう (金沢市史通史編3 近代: 896-899)。

「町内」、「近衆」、「近所」は閉鎖的境界が明確に示されていないが、「近衆」と「近所」は通りや小路で区切られた宗寂町三番丁近辺を指し、「町内」も三番丁より狭い範囲であろう。町内に居住するようになった新参者は町内のメンバーになるはずであるし、街灯の維持管理費なども分担することになる。ただし、弘安の日記をみると、土着層 (地の者) と流動層 (新参者) では弘安の人間関係の形成パターンに明確な区別がみられたのである。

### 9.3 近隣での活動内容

生活構造が個人の主体的選択による集団参与から構成され则认为なら、近隣関係は所与の集団の枠 (地域の限定) のなかでの可逆的人間関係の形成になる。また、表1では近隣関係に登場する人物をサブカテゴリー (町内、近衆、近所、親交団) のレベルで、その重複をみる事が可能であり、これが弘安にとっての近隣の社会空間を構成し、そこで生活構造が選択的に形成されていると考えてよいだろう。地域の限定でいえば、弘安の家を中心として徒歩圏内で連絡が頻繁にとれること、さらに、生活時間でみると弘安は深夜まで近隣の人々とつきあいを行なっているが、これは明治初期に金沢で電灯が通っていたこと、また街灯も大正期までに整備されたことによる。弘安の町内では大正4年に街灯が引かれ、弘安はその維持管理費を集金して回っている。

生活時間分析が生活構造をみる上で有効であるが、近隣の会合、遊び、火事、その他の類型別に活動時間をみると、1日のパターン、1月のパターン、年度を追った変化など、生活構造の時間的側面が分析できるであろう。この時間分析の詳細は今後の課題とし、ここでは近隣における活動内容を概観しておこう。仕事以外の近隣活動は夜に行われることが多いが、弘安の日記では夜の10時や11時まで近隣の者が集まっていることがめずらしくなかった。また、当時の職人の労働は朝6時から夕方6時、休日は毎月1日と15日の2回が基本であったが、弘安は居職であったため労働時間と近隣活動の時間との融通がきいたようである。これも居職の伝統工芸職人が近隣関係で中心的役割を演じるのに都合がよかったといえよう。弘安は日中に近隣活動をしていることもあれば、深夜まで仕事をしていることがあった。

表3には近隣における活動内容の概略を示してある。これをみると弘安が「近衆」と「近所」を近隣の人間関係の意味で用いていることがわかる。活動内容も対人的なレベルのものが多く、借金の話から、養子の話、見合い話など、特定の相手を想定した話題があげられている。餅や赤飯を配ったり (節句や祝いごと)、その他のおすそわけをしたりすることが多く、近衆や近所には年に数回、食べ物の贈与がなされている。また、近隣の子供と遊ぶときは「近衆」や「近所」が使われることから、「近衆」や「近所」は近隣のインフォーマルな人間関係を包摂する概念であると考えてよいだろう。日常生活で弘安は近隣の人々 (子供を含む) と親密で頻繁な関係をもっていたことがうかがえる。

表3 近隣における活動：カテゴリー別および年代別の記述内容

	町内	近衆	近所	親交團
大正2 (1913) 26歳	国旗掲揚(1)	借金話(1) 養子話(1) お礼(1) 謡(1) 葬儀手伝い(2) 雑談(1) 蜂巣除去(1) 元近衆の来訪(1)	大掃除(1)	
大正3 (1914) 27歳	提灯行列(1)	年賀(1) 餅を配る(2)		下相談会・準備(4)
大正4 (1915) 28歳	電燈管理集金(5) 御大典協力依頼(16) (装飾、提灯行列、旗、 ダシの手配、集金など) 専売局建築祝典(2)	餅・土産を配る(2) 見合い話(1) 火事(1) 子供の入学話(1) 葬儀(1) うわさ話(1) 御大典協力依頼(4) 専売局建築祝典(1)		参加予定人員確認(1) 発会式・懇親会の予定(1) 発会式(1) 会費徴収(3) 役員会(1) 相談会(1) 御大典の相談会(1)
大正5 (1916) 29歳	電燈管理集金(4)	年賀(1) 近衆の子供に本を読む(1) 火事(1) 見合い話(1) 入隊兵見送り(1)	電燈管理集金(1) 仕事の注文(1)	新年会で解散の話 不参加(1) 以後記述なし
大正6 (1917) 30歳	電燈管理集金(5) 梅澤先生建碑(5) (趣意書をもって協力依 頼募金)	年賀(1) 餅を配る(1) お礼(1) 電燈管理集金(1)	葬儀返礼(1) 火事(1) 結婚式赤飯配る(1) 芳野結婚近所お礼(1) 電燈管理集金(2)	
大正7 (1918) 31歳	年賀(1) 除雪(2) 電燈管理集金(3) 行灯(1) 入隊兵見送り(1) 除隊兵出迎え(1)	近衆の子供と遊ぶ(1) 近隣の大掃除(1)	年賀(1) おすそわけ(1) 餅を配る(1)	
大正8 (1919) 32歳	新年会(1) 電燈管理集金(3)		年賀(1) 餅・赤飯を配る(3) 消防演習(1) 子供衆を東別院に(1) 出産お礼(1) 見送り(1)	
大正9 (1920) 33歳	電燈管理集金(2) 手桶角力(1)		年賀(1) 生菓子配る(1) おすそわけ(2) 葬儀(1)	
大正10 (1921) 34歳	電燈管理集金(13) (電燈の数を増設する) 町内の看板注文(1)		年賀(1) 返礼(1) 子供の遊び(3) 入隊兵見送り(1) 見合い話(1) 葬儀(1) うわさ話(1) 電燈管理集金(2)	

これに対して「町内」は、近隣を一つの集団として意識しているときに使われているようである。都市祝祭の提灯行列や御大典行事への参加は、町内が全体として取り組むべき問題であるため、個々の人間関係によって処理することができない。電燈の敷設・増設を取り決

めるときも「町内」としてのまとまりが必要である(ただし、電燈の費用を定期的に集金するときには「近衆」や「近所」が使われることもある)。また、「親交團」の記述は大正天皇の御大典の時にしか出現しないが、メンバー構成や活動内容が「町内」とほぼ同じであるといってもよいだろう。この町内活動に関しても弘安は積極的に関与し、町内の調整役および雑用役を厭わずに引き受けていた。

弘安にとって近隣関係は、一方でインフォーマルな人間関係を基本とする「近衆」と「近所」、他方で一つの集団を想定した「町内」(および「親交團」)の2つの類型に分けることができる。どちらの領域でも弘安は、いわば善意で近隣関係に積極的に関与しているが、その関与の仕方は金沢の地の者との人間関係を通してのものであった。本稿では、そのような弘安の選択的な人間関係が、加賀象嵌職人としての経済的な利害関心によって方向付けられていたという解釈を試みた。すなわち、加賀藩の伝統と天皇の恩恵に基づいて「伝統都市」金沢を創出するという、金工界における近代化の戦略が、弘安をして地の者を大切に、地の者を中心とした地域社会の形成と維持に寄与せしめたという解釈である。しかし、弘安の近隣活動を詳細にみてみると、経済的背景だけで人間関係を選択しているとは考えられず、経済とは別の次元の論理が働いているように思える。

本稿では検討できなかったが、その原因は近隣関係の背景にある宗教関係の濃さにある可能性がある。弘安や父母は近所の神社仏閣への参詣を頻繁に行っており、その場で地の者と連絡をとりあい、種々の調整を事前に行っている可能性がある。金沢の町会(町内会)の前身組織が宗教的な講集団にあるという指摘(金沢市史通史編3近代:899)を、弘安の日記記述にみることができるのである。流動層を受け入れようとしない金沢の保守性が「なんまいだ精神」と関連しているのではないかという考え方がある(中村 2005: 69)。今後の検討課題として宗教的活動を含めた弘安の生活構造を分析し、大正期金沢で生きた土着層・中間層の伝統工芸職人が地域社会の形成と維持に寄与しえたことを明らかにしたい。

〔注〕

- (1) ただし、明治以降、金沢は近代都市として発展してきたのであり、大正期には全国でも有数の「モダン」な都市であった(金沢市史通史編3近代:518)。「伝統都市」の側面も「モダン」な側面も、金沢が近代都市として発展するために必要とされてきた二側面である。旧金沢城周辺の中心街の再開発は、1990年代以降、急速に現代的手法で「伝統都市」が演出されているが、これも1980年代から始まった中心街の空洞化に対処し、「伝統都市」としての観光資源を開発するためのものである。
- (2) 金沢の町会の成立については様々なパターンがあったようである。地域の秩序の担い手として、町会が成立してきたとも考えられるが、成立の経緯は自発的というより、行政からの要請に応えたものであった。また、旧来の講や座の集団が規約をもった町会になったとも考えられている(金沢市史資料編14民俗:49-64)。弘安の町内では「親交團」として組織化しなくても、従来のやり方で町内の各種出来事に対処することができたといえよう。
- (3) 金沢では近隣関係の基盤として近世から続く寺院の講の存続があげられる。廃仏毀釈の影響はあまりなく、お寺(浄土真宗)の影響は父母ともに強いようだ。真宗教団は廃仏毀釈に反対し越前では農民一揆もあったので、明治政府は初期の強行姿勢をやめたという。また、頼母子講、大師講など、種々の講が存在し、近隣のひとびとが集散していた。神社仏閣にかかわらず弘安家族は、父母を中心に参詣頻度は月に10回を越えるほどであった。弘安も参詣の記述頻度は大正期に毎月10回近くになっている。弘安だけでなく、家族(父、母)の参詣も日記には詳細に記述されている。宗教関係の場合、個人単位より家族単位で参与することが多い。なお、太子講は北陸の真宗では聖徳太子

が仏教の発展に貢献したことから2月22日から3月22日（忌日）に開かれる（金沢市史民俗：389）

〔参考文献〕

- 青木秀男 2006「近代民衆における自立の構造 ―加賀象嵌職人の場合―」『社会学評論』vol.57, No.1.  
岩崎信彦編著 1989『町内会の研究』御茶の水書房  
大石嘉一郎・金澤史男編著 2003『近代日本都市史研究 ―地方都市からの再構成―』日本経済評論社  
金沢市史編纂委員会 2001『金沢市史 資料編 14 民俗』北国出版社  
金沢市史編纂委員会 2003『金沢市史 資料編 12 近代二』北国出版社  
金沢市史編纂委員会 2006『金沢市史 通史編 3 近代』北国出版社  
激動の地方史製作委員会 1992『激動の地方史 ―ドキュメント石川 維新・デモクラシー・大戦』能登印刷  
鈴木広 1986『都市化の研究：社会移動とコミュニティ』恒星社厚生閣  
高澤裕一・河村好光・東四柳史明・本康宏史・橋本哲哉 2000『石川県の歴史 県史 17』山川出版社  
田中喜男 1968『百万石の職人』北国書林  
田中喜男 1974『加賀象嵌職人 ―米澤弘安の人と作品―』  
田中喜男 1992『伝統工芸職人の世界』雄山閣  
中村則弘 2005『脱オリエンタリズムと日本における内発的發展』東京経済情報出版  
橋本哲哉・林春一 1987『石川県の百年 県民百年史 17』山川出版社  
宮元又久編 1982『明治・大正・昭和の郷土史 19 石川県』昌平社出版  
山田二郎編 2002『かなざわ偉人物語④』金沢市立泉野図書館  
若林喜三郎監修 1992『激動の地方史』北陸放送株式会社  
渡邊益男 1996『生活の構造的把握の理論』川島書店

〔付記〕

本稿は、佛教大学平成 18 年度特別研究費の成果の一部である。

（こんどう としお 現代社会学科）

2006 年 5 月 10 日受理